

【研究内容1の具体的な内容とその評価】

探究型カリキュラムの開発のために>

| | | | | | | |
|-------|--|----|---|----|---|----------|
| 科目 | グローバル探求 BASIC | 学年 | 1 | 単位 | 1 | 受講人数は21名 |
| 活動の目標 | 1. 社会を知る 自分の周りの世界で何が起きているかについて、生徒が語ることができる 2. 社会の中の自己を知る 自分の周りの世界に自分がどう関わっているか、接点を持っているかについて、生徒が語ることができる。 | | | | | |
| 教材 | 学びの記録・iPad (Classi/ ロイロノート)・ビデオカメラ・マイク・マナボード・ホワイトボードペン・付箋・模造紙 | | | | | |
| 留意点 | 1. テーマ設定などについて、生徒たちが自分で決められるように教員は留意する 2. フィールドスタディ、得られる知見などが予定調和にならないように教員は留意する | | | | | |

<スケジュール>

・授業は60分授業 / 毎週火曜日の放課後 15:45-16:45

| | | |
|--|---|---|
| 第1フェーズ：知る SDGs/自分の関心/生の声/仲間/ 授業形態などを「知る」 | ①5/18 | ・SDGsカードゲーム「×(クロス)」 |
| | ②6/1 | ・市民としての社会参画 外部講師 川中 大輔 氏 |
| | ③6/7 | ・ガイダンス：「学びの記録」の記入方法 ・SDGsのランキング作成 |
| | ④6/15 | ・社会における身の回りの問題について気づく ・社会の問題について取り組んでいる団体について知る |
| | ⑤6/22 | ・グループで決めたテーマに関して調査したことをプレゼンする |
| | ⑥7/15 | ・日本の貧困問題 外部講師 能島 裕介 氏 |
| 第2フェーズ：探る 自分の関心/フィールドスタディ(FS) 先の活動や課題/観点と問い/FS 先の 生の声を「探る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】 | ⑦9/14 | ・生徒たちが関心のある分野の企業調査 ・フィールドスタディのグループ作り |
| | ⑧10/5 | ・フィールドスタディ先候補2つについてグループ発表 ・訪れたいFS先の投票 |
| | ⑨10/19 | ・フィールドスタディにおける学びの手法「観点と問い」の理解 |
| | ⑩11/10 | ・フィールドスタディ先についての知識の整理と「観点と問い」の作成① |
| | ⑪11/16 | ・フィールドスタディ先についての「観点と問い」の作成② |
| | FS 12/6-16 | ・フィールドスタディ(パナソニック・アシックス・JALスカイ大阪、兵庫県立男女 共同参画センター、神戸みらい学習塾、おてらおやつクラブ) ※ただし、パナソニックとアシックスは訪問が叶わなかったため、後日オンラインにてインタビューを実施 |
| | ⑫1/11 | ・3年生によるKG PEACE MAP (ハンズオンラーニング) についての紹介 |
| | ⑬1/18 | ・フィールドスタディのまとめ(6つの観点)の指示 |
| | ⑭1/25 | ・KG PEACE MAPを使った学内フィールドワーク |
| | 第3フェーズ：共有する 中間発表・最終発表を通じて学び/発 見/課題/アクションプランを共有 【整理・分析】 【まとめ・表現】 | ⑮2/15 |
| ⑯2/22 | | ・中間発表に向けて、6つの観点を5つの観点到らし込む活動② |
| ⑰2/26 | | ・フィールドスタディについての中間発表 |
| ⑱3/9 | | ・再解釈と再構築1 他グループの発表を見て評価・フィードバック |
| ⑲3/14 | | ・最終発表(6グループ) G1 サステナブルスマートタウン G2 スポーツと再生エネルギー G3 AI活用と働き方 G4 男女共同参画・ジェンダー G5 日本の子どもの貧困(教育) G6 日本の子どもの貧困(食事) |

<各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

第1フェーズ：【課題の設定】

1. このフェーズでの目標

- 目標 1) 生徒たちが、SDGs が身近な問題であり、自分たちの生活に結び付けていくことが大事だと大体説明できる。
- 目標 2) 生徒たちが、SDGs の問題が社会でどのようなことが起こっているかを具体的な例を挙げて説明できる。
- 目標 3) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。
- 目標 4) 生徒たちが、協働するグループワークなどに積極的に参加し良い授業の雰囲気をつくることことができる。
- 目標 5) 生徒たちが、学びの記録ワークシートのねらいを理解して記入ができる。

2. 具体的な活動

①5月18日【SDGs カードゲーム「×クロス」】

金沢工業大学 SDG s 推進センターが開発した SDGs をゲーミフィケーションによって学ぶことのできる「×クロス」を用いて、17の目標を達成するアイデアを出しあい、一方を得ようとする他方を犠牲にしなければならないという「トレードオフ」の解決に取り組んだ。

また、グループで作ったアイデアをシェアし、お互いに質問をすることで、着眼点や発想の意図などを確認し、各自の省察に繋げた。



②6月1日【市民としての社会参画 外部講師 川中大輔氏】

シティズンシップ教育や社会イノベーション実践を専門としている龍谷大学准教授川中大輔氏によって、社会起業やNPO、NGO、ボランティアや企業のCSRなど様々な社会参画の可能性について講演をいただいた。まず、生徒は自分の身の回りにある「社会問題」が手の届く範囲の非常に限定的なものであり、知識としても経験としても知りえない部分に社会問題が潜んでいることを知り、そこに光をあてて解決に取り組む団体や企業があることを学んだ。



③6月7日【「学びの記録」の記入方法 時任隼平氏】

カリキュラムアドバイザーであり関西学院准教授の時任隼平氏より、授業での学びの過程の重要性についてワークショップ形式で学んだ。知識の習得だけでなく、気づきや発見、考えの変化のプロセスを記録し可視化することにより、授業中の学びをメタ認知することに繋げ、成長の実感とともに、次への学習意欲へとつなげることを意図している。今回は SDGs 17の目標に優先順位をつけるとすればどのように考えることができるかという課題をグループで解決するワークショップを行った。



④6月15日【社会の問題や取り組む団体について知る】

自分たちの身の回りにどのような社会問題があるのかをブレインストーミングし、カテゴリーに分類してそれぞれにどのような関係があるのかを考察した。次回までに一つテーマを決めてそのテーマに取り組む団体を調べ、どのような活動をしているのかをまとめてプレゼンテーションを作成するように指示をした。



⑤ 6月22日【社会の問題に取り組む団体についてプレゼンする】

以前より自分たちの生活やニュース・新聞で見聞きする情報に含まれている社会問題だけでなく、少し調べるとより多岐にわたる問題があることに気づかされる。生徒は、プレゼンを作成する過程でブレインストーミングでは出てこなかった問題にも気づき、その問題に取り組む団体について調査することができていた。



⑥ 7月15日【日本の貧困問題 外部講師 能島裕介氏】

日本の貧困と教育に関する問題に実践的に取り組まれている尼崎市理事の能島裕介氏より、日本における貧困とはどのようなものか、について講演をいただいた。事前に、「日本における貧困」についてインターネットで情報を集め、自分たちの街にも「貧困」と呼ばれる状態にある人が存在していることを知っていた生徒らは、能島氏に対して、「相対的貧困を解決することのできない理由はどのような点にあるのか」など、より問題解決に志向するクリティカルな質問や意見が出た。



3. 活動の評価方法

- ・講演やグループワークでの自主的な発言について簡単に記録し、ポイント化した。
- ・「学びの記録」について①から評価を開始。毎回授業後に回収し、フィードバックを試みた。
- ・「学びの記録」のルーブリックは下の通り。

| | 新しい事実・知識の量/質とその整理 | 他者や自分の主張の量/質とその考察 |
|---|---|--|
| A | 新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点を持ってしっかりと整理されている。 | 他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。 |
| B | 新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。 | 他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。 |
| C | 新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がななくそのままの羅列となっている。 | 他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。 |

4. 検証

目標の達成度・課題

- ・目標 1)2)について

生徒は新聞やテレビのニュース番組で知る情報が、社会問題としてどのような課題を抱え、それを解決するためにどのような団体が活動しているのかという知識の少なさに気づくことができた。それは、自分たちの身の回りに存在する問題であり、また、顕在化していない問題についても知ろうとすることが必要であると認識することができたようだ。それぞれの問題がSDGsに繋がっており、17の目標に収斂されていることについても理解することができた。

- ・目標 3)について

②の授業で、川中氏から社会問題の俯瞰図を提示頂き、「社会的課題」が多岐に渡っていること、また、それらが連関しているということ意識するようになり、その中から自分の生活や経験に引き寄せて、特定のジャンルの社会

問題についての知識を得ようと取り組んだ。また、⑤の授業でのプレゼンではそれらの社会問題を自分たちの言葉で説明することができた。一方で、「関心」は調べていく過程で生まれてくるものでもあり、この「課題の設定」における「自分の関心のある社会的課題について」という部分は流動的であるということも確認できた。生徒は、第1フェーズの授業をとおして、多岐に渡る社会的課題に関心を深め、気づきと思考を繰り返して少しずつ価値観の形成を行っているようである。



・目標4)について

この授業では本校に併設した関西学院中学部からの進学者と外部中学校からの進学者とがほぼ同数在籍しており、あらかじめ人間関係が形成されている状態で始まったわけではなかった。しかし、授業内におけるグループワークを通してアイスブレイクともなり、協同的に課題解決に向けて取り組む土壌が養成されていった。特に、授業外で取り組ませるプレゼンの準備は、クラスを越えて連絡を取り合い、一つの課題に取り組むチームワークの術を習得することに繋がった。それぞれが、意見を持ち、発言することがポジティブにとらえられるクラスの風土にもつながり、誰もが授業への積極的な姿勢を見せることができていた。

・目標5)について

生徒によって表現の仕方が違っているものの、創造的な思考への意識づけに繋がられている。課題としては、話し合いの最中にも記録を書くことに意識が向いてしまう場面があることと、学びの記録を授業時間内に書き切ることの難しさがある。

5. 今後改善すべき点について

- ・「調べてプレゼンをさせる」という一連の活動は、どうしてもインターネット上の情報を集めてきて整理するという事に終始してしまうので、図書館の利活用について、また、家族や親戚へのインタビューなど、情報収集の方法について学ばせる機会を設けてはどうか。
- ・テーマを決めて「調べてプレゼンをさせる」時には、「疑問」と「仮説」を作ることを意識させたが、その「仮説」の妥当性について検証し省察させる時間をとることができなかった。多くのゲストから講演を聞き、ワークショップをしたが、学びの記録による省察や知識の整理だけでなく、教員がファシリテートしながら時間をとって振り返ることも良いのではないかな。

第2フェーズ：【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】

1. このフェーズでの目標

目標1) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。

目標2) 生徒たちが、地域（ローカル）の実社会で活動されている方々やその団体の取組や課題をフィールドスタディ（FS）を通じて、語るができる。

目標3) 生徒たちが、FS で用いる学びの手法を使って「観点と問い」を作成し、インタビューや聞き取りをすることができる。

目標4) 生徒たちが、社会との接点を自ら作り出す楽しさについて語るができる。

目標5) 生徒たちが、FS の経験で得た学びを、アクションプランにつなげるイメージを持つことができる。

2. 具体的な活動

⑦ 9月14日【関心のある分野の団体調査・FS先グループ作り】

⑧ 10月5日【FS先候補についてのプレゼン】

第1フェーズで調べた「関心のある分野の団体」について再度、情報を集め、そこで解決したいと考えている課題を明文化した。「環境問題」や「ジェンダー」、「貧困」とテーマでは簡単に言葉にすることができる「問題」も、そののど

ここに課題があるのかを言葉にすることで、自分がどこまで理解できているのか、どこに解決すべき問題が潜んでいるのかを意識させることができた。また、調べて得られた情報をもとに、「ここは〇〇に取り組んでいるが、きっと××のような課題を抱えているはずだ」という仮説を立て、そこへフィールドスタディしに訪問する必要性について考えさせた。ただ、社会見学に行くわけではなく、解決するために現地に行く必要がある課題を持っていなければフィールドスタディにはならないという点を強調した。



⑨ 10月19日【フィールドスタディにおける学びの手法】

前回の授業で、フィールドスタディと社会見学の違いを意識させるために、「疑問」と「仮説」を設定させた。さらに、以下の4つの項目について意識させ、FS先について具体的にどのように考えるべきであるのかをグループで話し合わせた。



- 訪問先へどのようなことを検証しに行こうとしているのか
- 団体・企業の取り組みを具体的に把握しているか
- どのような経緯・理由でその訪問を計画することになったのか
- 伝達しようという意欲を持つことができているか

⑩ 11月10日【FS先についての知識の整理と「観点と問い」①】

⑪ 11月16日【FS先についての「観点と問い」②】

各自で調べてきた情報をグループ内でシェアし、一つのプレゼンとして構成するワークを行った。同じFS先であっても、環境問題、働き方、ジェンダー、貧困など様々な観点で切り込むことができ、さらに、「疑問」と「仮説」を作るとき、「わざわざ訪問しなくても良い」という程度に収まってしまうがちであることも意識させた。FS先の取り組みの背景やそこで活動している人の思いといった、「訪問しなければわからない」と捉えられそうな内容も、「仮説」を設定することによりそれがどれだけ意義のある疑問・質問であるのかを確認することができた。また、グループで話し合い、情報をまとめ、観点を整理し、プレゼンさせることで、FSの目的意識も共有することができるようになった。プレゼンの後は、「フィールドスタディに向けた`観点'と`問い'の設定」(資料5)というプリントを用いて、もう一度、プレゼンの内容を明文化し、グループ内で確認を行った。



フィールドスタディ実施

- ・授業⑨で「観点と問い」を作成しきれなかったグループは空き時間に教員のチェックを繰り返し受けた。
- ・各グループに教員1名引率。オンラインも同様。WWL 選択授業を受講する2年や他の教員も参加可とした。
- ・集合時間/行き方/プレゼンの内容/観点と問いについては、各グループがロイロノートを使って他のFS参加メンバーに事前に伝達。



⑫ 1月11日【3年生によるKG PEACEMAP 紹介】

⑭ 1月25日【3年生によるKG PEACEMAP フィールドワーク】

フィールドスタディで「仮説」を検証し、情報を整理するところまでは、これまでの学習で習得してきた知識や技能を用いて取り組むことができると予測されるが、「成果物」を創造するアイデアや実行にうつす術に関しては授業で取り上げてこなかった。あくまでも、社会で実際に活動する団体を対象としていたため、自分たちが行動に移す実例を知り、課題解決の手段として社会にいか還元しうるかを体験した。3年生がハンズオンラーニングの授業で作成した「KG PEACEMAP」を使って実際にARを用い、学内外の平和関連施設や史跡を訪れ、先輩がどのようにしてこのMAPを作成したのかを学んだ。AR技術を用いることや、印刷物をデザインして発行すること、その印刷の費用を工面するために企業に協賛を取り付けることなど実践的なことを目の当たりにした。自分たちが経験で得た学びをどのように実践につなげるか、生徒たちは「学びの記録」に考えを記入した。



※コロナウイルス感染症による学年閉鎖の影響で、⑭の授業は予定していた1月18日に実施することができず、隔週の開催となった。

⑬ 1月18日【フィールドスタディのまとめ（6つの観点）】

フィールドスタディで「仮説」の検証を行ったが、改めて以下の6つの観点に基づいて自分たちのFSを振り返り、プレゼンに向けてどのようなことに焦点を当てて構成を進めるのかを確認させた。

観点 1)フィールドスタディで再確認できたこと

(インターネットや著書を通じて既に知っていたことを直接現場で確認できたこと)

観点 2)フィールドスタディで新しく知った知識

観点 3)フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちの考え(想いや信念等)

観点 4)フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちが向き合っている課題

観点 5)フィールドスタディに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと

観点 6)フィールドスタディ先の現場の人たちが向き合っている課題に対して、高校生である自分たちができること
グループで話し合った内容は観点別にロイロノートのカードに記入させ、提出箱に提出させた。

3. 活動の評価方法

- ・⑩11月16日 ⑭1月25日の「学びの記録」を回収し、教師が内容を評価。
- ・「フィールドスタディに向けた「観点」と「問い」の設定」と「学びの記録」のルーブリック（フェーズ1と同様）

| | 新しい事実・知識の量/質とその整理 | 他者や自分の主張の量/質とその考察 |
|---|--|--|
| A | 新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点を持ってしっかりと整理されている。 | 他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。 |
| B | 新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。 | 他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。 |
| C | 新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がなくそのままの羅列となっている。 | 他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。 |

4. 検証

目標の達成度・課題

- 目標 1) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。
- 目標 2) 生徒たちが、地域（ローカル）の実社会で活動されている方々やその団体の取組や課題をフィールドスタディ（FS）を通じて、語るすることができる。
- 目標 3) 生徒たちが、FS で用いる学びの手法を使って「観点と問い」を作成し、インタビューや聞き取りをすることができる。
- 目標 4) 生徒たちが、社会との接点を自ら作り出す楽しさについて語るすることができる。
- 目標 5) 生徒たちが、FS の経験で得た学びを、アクションプランにつなげるイメージを持つことができる。

・目標 1) について

フィールドスタディの訪問先を調査し、テーマに関する現場の実態を把握しつつ、調べる中で身に付けた多様な知識を社会的課題に引き付けて考えることができるようになったようである。「関心のある社会的課題」に対して知識が増えただけでなく、そこに内在する課題を解決する団体について知るプロセスで、社会的課題の諸相や内実について理解することができ、生徒が探究した特定の分野に関しては「ある程度説明できる」というところまで達成している。それは、学びの記録や授業⑩のプレゼンでの彼らの言説などからも評価できた。しかし、社会的課題は多岐に渡る諸問題が関連し、また、当事者の状況や地域によってさまざまであり、それぞれについての的確に把握し、説明できるところにまでは到底及んでいない。

・目標 2)3)について

中間報告に向けて確認したい観点として6つの項目を生徒に提示して意識させるようにした。授業⑬で示した観点を前もって以下のようにかみ砕いて説明をした。「FS 先の活動概要、疑問と仮説、FS で直接確認できる相手のリスポンズや直接見聞きしたこと、現場の人たちはどのような課題を抱えているのか、高校生でありながら自分たちの発想によって実現できる課題解決の方法とはどのようなことか」といった項目である。そのことにより、FS 先についてより課題解決の意識を持たせることができ、知識を吸収し、「観点と問い」を通して自分たちの課題解決に生かそうという意欲が見られた。そのことが、結果として「団体の取り組みや課題」を語ることに繋がっていた。しかし、インタビューのための観点や質問も生徒の想定する範囲内のものとなり、そのことが、FS 先が抱える多くの問題の一部に過ぎない面も否めない。「学びの手法」は身に付けつつも、視野を広く持ち、他との関係も加味しながら考察できるほどの力はまだ及んでいない。

・目標 4)について

FS 先の一つに「おてらおやつクラブ」があるが、そこでのインタビューによって、相対的貧困にある子どもたちにおやつを配る、支援先から送られたおやつを仕分けするなどの作業を担う人手が足りないことを知り、生徒が自発的にアポイントを取り、別の日に改めてボランティア活動として参加した。また、男女共同参画センターに訪問したグループは FS の際に担当の方と連絡先を交換していただき、ジェンダーに関する正確な知識や男女共同参画の実情について SNS を通して啓蒙するという活動を提案し、連絡を取り合ってプロジェクトを進めようとしている。このように、生徒が自発的に自分たちの意欲関心に基づいて授業外での取り組みを進めようとしたのは、3年生の先輩が KG PEACEMAP を自らの発想で実現した例も影響している。すべての生徒がそのような主体的な行動に移しているわけではないが、少なくない数の生徒が自分たちの発想を実現し実行に移そうとできているという点で、「社会との接点を自ら作り出す楽しさ」を感じつつあるのではないかと評価している。

・目標 5)について

上述したように、一部の生徒は具体的な発想を持ち、実現にむけて動き出そうとしているが、グループとして「アクションプランをイメージ」することにはつながっているとは言えない。やはり、SNS を通して同級生や世間に社会的課題についての啓蒙や活動の紹介といった発想にとどまることが多く、より創造的なアイデアに繋がられる例が少ない。特に、アシックスやパナソニックといった大企業にインタビューをしたグループはその企業の取り組みの先進性からも、取り組みのポジティブな面が印象に残り、企業の CSR の宣伝に終始しがちな傾向が見られた。自分たちが発信するアクションとして、どこをターゲットに何を行うのかを具体的に創造できるところにまで導きたい。

5. 今後改善すべき点

・フェーズ 1 にて関心のある社会的課題は、まず広く社会にどのような問題があるのかを知ることを意識させたことにより、生徒自身が多岐に渡る問題に触れることができ、自由にテーマを設定して探究を始めることができていたが、外部講師に講演をいただいたテーマとそうでないテーマとで基本的な知識や理解の差が生まれた。

・入学間もない 1 年生がクラスをまたがって関心のあるテーマをきっかけの一つのグループとなり、探究活動を進めるが、コロナ禍でマスク越しであることや、距離を縮められないなどもあり、人間関係の構築に時間がかかってしまった。できる限りグループワークを入れて進めているが、FS を経るまでは人間関係が希薄であり、情報の収集や疑問点の洗い出し、仮説の設定の事前ワークに関してはグループワークが円滑に進んだとは言えなかった。あくまで、個人で取り組んだことを持ち寄って繋げたプレゼンとなり、共通理解のもと、一つの課題に取り組んだとはいいいがたい状況であった。FS を経てからは、チームビルディングができており様々に役割を分担して探究活動に取り組んでいたことから、もう少し早い段階で共同作業を行うコミュニティの形成を意図したほうがよかったと言える。

・3年生のハンズオンラーニングで成果物として作成した「KG PEACEMAP」の存在は彼らに「自分たちでアイデアを出して何かを成し遂げる現実味」を想起させ、アクションプランに繋がった。しかし、すでに述べたように、「具体的に創造できる」には力及ばず、SNS での啓蒙や、リサイクル品の回収といった意義はあるものの、その活動を通して何を解決したいのかといったターゲットのぼやけたアイデアが多かったことが悔やまれる。探究の課題を設定する際に、具体的に解決するための策にはどのような例が考えられるのかをもう少し多く提示すべきだったかもしれない。生徒の自由な発想に期待するあまり、出たところ勝負となってしまったきらいがある。

・コロナ禍で現場への訪問になかなか許可がおりず、検討いただくのに時間をかけすぎてしまい、結局オンラインで別の企業にインタビューをお願いすることになった班ができてしまった。実際に訪問できないことは、これからも距離や費用の面でありうることはあるが、オンラインでインタビューする場合と、実際に訪問する場合とでどのような違いがあり、どのようなことに注意しておくべきかをブラッシュアップしておくことが必要かもしれない。例えば、どうしても生徒からの質問が形式的になってしまうため、企業・団体側の「説明」が主になってしまう。目にしたものと雑談の中で生まれてくる機微が欠ける分、形式的な問答になりかねないため、相応の工夫が求められる。

第3フェーズ：【整理・分析】【まとめ・表現】

1. このフェーズでの目標

目標 1) 生徒たちが、観点1～5に従って、FS 先で学んだことを内在化して、発表することができる。

目標 2) 生徒たちが、観点1～5に従って、ロイロノートやパワーポイントを用いて発表することができる。

目標 3) 生徒たちが、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会で起こしていく方向性を考えることができる。

目標 4) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点についてどう克服しようとしたかを認知できる。

2. 具体的な活動

⑮ 2月15日【5つの観点に落とし込む活動①】

⑯ 2月22日【5つの観点に落とし込む活動②】

中間発表に用いる「生徒相互フィードバック表」（資料7・8）「教員による評価」（資料12）の観点の説明を行った。

「生徒相互フィードバック表」は生徒がお互いに発表をどのように評価すべきなのかを理解することで、逆に、自分たちがどのようなことに気を付けて発表をしなければならないかの意識づけにもなる。また、教員も同じ項目で点数化して評価を行うことを伝え、プレゼンの最終的な評価を意識させることにもつながった。さらに、教員からは、それぞれの項目について段階別の評価とコメントが付された用紙がフィードバックされることも伝えた。

なお、このチェック表の観点は以下のとおりである。

観点 1) FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点 2) 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解できているかどうか。

観点 3) 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。

⑰ 2月26日【フィールドスタディについての中間発表】

今年はクラスを二つに分けることはせず、時間はかかるが、すべての班の発表を全員で聞くことにした。発表テーマのバリエーションが多岐に渡り、生徒間の気づきにつながりやすいのではないかと、生徒からのレスポンスの数も多いほうが思考の振れ幅が豊かになるのではないかと考えた。生徒からのレスポンスは相互評価表だけでなく、「クリティカルな質問」をロイロノートの提出箱に各グループに提出させ、最終発表に向けての準備に生かせるよう工夫した。質問はクラス内生徒の誰もがみられるような共有設定を行い、それぞれにどのような疑問が生まれているのかを確認させることもできた。



- ①なぜ未来学習室を選んだのかの理由をより具体的に教えていただきたい。
- ②神戸市がボランティア活動の副業に関して寛容な理由は何か？
- ③なぜ講師を性別で分ける必要性があるのか？区別なのか差別なのか…。

(例) 生徒から生徒への質問カード

・関心のある社会的課題のトピックとフィールドワーク訪問先、発表テーマ一覧

2021年度 グローバル探究BASIC フィールドスタディ班

| | トピック | メンバー |
|----|---------------|----------------|
| 1班 | 環境問題 | |
| | パナソニック | サステイナブルスマートタウン |
| 2班 | 環境問題 | |
| | アシックス | スポーツと再生エネルギー |
| 3班 | 職場労働環境 | |
| | JAL | AI活用と働き方 |
| 4班 | ジェンダー | |
| | 兵庫県男女共同参画センター | 男女共同参画・ジェンダー |
| 5班 | 教育 | |
| | 神戸みらい学習室 | 日本の子どもの貧困と教育 |
| 6班 | 貧困 | |
| | おてらおやつクラブ | 日本の子どもの貧困と食事 |

・中間発表の準備のために、授業外で生徒がグループワークを行い、プレゼンの準備ができるようにセッティングした。なお、この時、プレゼンの練習は録画し、実際に自分たちで評価をしてみることで観点とのずれを確認させることを指示した。

グロ探BASIC受講生が使える部屋と時間

特別教室棟1階

小教室①②

中休み 10:20～10:45

昼休み 12:35～13:20

放課後 15:30～17:00 (延長希望は事前に言ってください)

2月16日(水)・17日(木)

21日(月)～25日(金)

※プレゼンの準備はオンラインでも構いませんが、少なくとも一度は**プレゼンの練習と検証**をしましょう。

→自分たちで録画し反省点を洗い出すなど

中間報告の発表項目(ロイロ)

- 1) FS先の活動概要
- 2) 自分たちの観点と問い
- 3) FSで直接確認できたこと 相手のリスポンス/直接見たこと
- 4) ・現場の人たちはどのような課題をどのように語っていたのか
・自分たちはそれを聞いてどう思ったか
- 5) 高校生である自分たち当該テーマについてできること
・具体的にどのようなことならできそうか
・それが実現可能な根拠

⑩ 3月9日【再解釈と再構築 フィードバックの確認】

「中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】」(資料9)を用いて、自分たちのプレゼンが各観点においてどの程度達成できていたのかを振り返らせた。自らを「発表者」と客観化してセリフやしぐさを冷静に分析させることによって、各観点を満たす内容に近づけられているかどうか、また、分かりにくい言い回しになっていないかどうか、全体の構成に工夫が必要でないかどうかなどを確認した。このようなメタ認知と他のグループの評価を連関させることによって、自分たちのプレゼンに対する改善点への気づきに繋がった。例えば、「発表者(自分自身)の目的は何ですか?」という問いを自らのプレゼンを分析しながら回答する過程に、客観化し自己省察する姿勢を促すことができる。また、「ストーリーとしてわかりやすくなっているか」という問いで、プレゼンが一つの「伝達手段」であり、単なる記述物ではない点を意識することに繋がった。多くのことを調べ、整理してきた生徒たちにとって、限られた時間の中でどこに焦点をあてて、何を表現しようとするのかという取捨選択はそれまでにない発想となった。

自分たちのプレゼンを見直し、どの点についてどのような指摘がなされているのかを確認するために、教員からのフィードバック用紙を活用させた。(資料12)

中間発表から最終発表に向けてのポートフォリオとして、Classi アンケート機能を用いて、以下のように「意識の変化について」と「問題の克服」について400字程度の作文をさせた。(資料10)

設問 1 【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思っていたのと違う!」と活動内容そのもの や、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。

設問 2 【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなもの でしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して 自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。

⑭ 3月14日【最終発表】

- ・視聴覚室にて、6グループによる発表を行った。
- ・発表は12分間、質疑応答は5分間、パワーポイントまたはロイロノートを発表資料として使用（資料11）
- ・生徒たちは「最終発表用 生徒相互チェック表」を用いて発表を聞いた。

中間発表時の観点は3つであったが、最終発表時は以下の5つの観点をを用いてチェックが行われ、教員もこれに従い発表を評価した。

観点 1) FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点 2) 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。

観点 3) 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。

観点 4) 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

観点 5) 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

・発表後、部長・副部長から全体の講評を行い、次年度に向けてアクションプランを実行に移せる力と、探究的な学びをけん引する存在として学年の中でリーダーシップを取れるようにと激励した。

- ・相互評価シートと振り返り Classi ポートフォリオを提出するよう指示をし、成績返却の日時を確認した。



3. 活動の評価方法

■授業⑩の「中間発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点した。

「中間発表 相互チェック表」の評価のルーブリック

| | 観点ごとのチェック/知識や考えの深まり | 発表者のFS先の情報に対する自分の気づき |
|---|---|--|
| A | 発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。 | FS先に対する自分の考えと、発表の内容から得た情報とが、つながりを持った深い「気づき」として記述されている。 |
| B | 発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。 | 気づきや感想がやや短絡的、表層的である。 |
| C | 発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。 | 気づきや感想が短絡的、表層的である。 |

■授業⑪の6グループの中間発表を動画で見直し、以下のルーブリックで評価。また、それぞれの観点別にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメントも追記して返却した(資料12)。

| | |
|--|---|
| 観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。 | |
| A (6点) | どのような問題意識(きっかけ)でFS先を選定したのか、訪問の目的(何を知らなかったか)が明確である。 |
| B (4点) | FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。 |
| C (2点) | FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。 |
| 観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。 | |
| A (6点) | 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。 |
| B (4点) | 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。 |
| C (2点) | FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。 |
| 観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。 | |
| A (6点) | 当該テーマについて何ができるのかが具体的にあり、それが実現可能であることを証明できている。 |
| B (4点) | 当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現可能であることを証明できていない。 |
| C (2点) | 何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。 |

■授業⑫の後に、Classi のアンケートを配信し、以下のルーブリックで評価。

| 【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思ったのと違う!」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。(400字を目安に) | 評価 | 【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。(400字を目安に) |
|--|-------|---|
| 自分の思考の変化についてメタ的に分析することが出来ており、分析した内容が具体的に記述されている。 | A(7点) | 課題を解決していく上での「問題点」を的確に見つけ出せており、さらに、その「問題点」について自分なりの視点で具体的な対策を講じている。 |
| 自分の思考について分析できているが、思考の変化についてメタ的に捉えることが出来ておらず、直感的な内容が記述されている。 | B(5点) | 課題を解決していく上での「問題点」が「課題そのもの」の難易度に依存する内容しか見つけ出せておらず、その「問題点」の解決策が課題解決そのものと直結している。または、対策が具体的でない。 |
| 自分の思考について分析できておらず、内容が不明瞭。または、文字数が著しく足りない。 | C(3点) | 課題を解決していくうえでの「問題点」を明らかにできておらず、対策が直感的なものに過ぎない。または、文字数が著しく足りない。 |

■授業⑬の「最終発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点。

「最終発表 相互チェック表」のルーブリック

| | 観点ごとのチェック/知識や考えの深まり | 発表者のFS先の情報に対する自分の気づき |
|---|---|--|
| A | 発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。 | FS先に対する自分の考えと、発表の内容から得た情報とが、つながりを持った深い「気づき」として記述されている。 |
| B | 発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。 | 気づきや感想がやや短絡的、表層的である。 |
| C | 発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。 | 気づきや感想が短絡的、表層的である。 |

■授業⑨の6グループの最終発表を動画で見直し、以下のループリックで評価。また、それぞれの観点別（中間発表時の観点3つに、観点を2つ追加）にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメントも追記して、Classiのコンテンツボックスにアップ。

| | |
|---------------------------------------|--|
| 観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。 | |
| A (6点) | どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知らたかったか）が明確である。 |
| B (4点) | FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。 |
| C (2点) | FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。 |

| | |
|--|--|
| 観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。 | |
| A (6点) | 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。 |
| B (4点) | 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。 |
| C (2点) | FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。 |

| | |
|---|--|
| 観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。 | |
| A (6点) | 当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。 |
| B (4点) | 当該テーマについて何ができるのかが具体的に示きされているが、それが実現できることが証明できていない。 |
| C (2点) | 何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。 |

| | |
|---------------------------------|--|
| 観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。 | |
| A (6点) | スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。 |
| B (4点) | スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。 |
| C (2点) | スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。 |

| | |
|----------------------------------|--|
| 観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。 | |
| A (6点) | 発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。 |
| B (4点) | 発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。 |
| C (2点) | 情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。 |

4. 検証

■目標の達成度・課題

目標 1) 生徒たちが、観点1～5に従って、FS先で学んだことを内在化して、発表することができる。

目標 2) 生徒たちが、観点1～5に従って、ロイロノートやパワーポイントを用いて発表することができる。

目標 3) 生徒たちが、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会でアクションを起こしていく方向性を考えることができる。

目標 4) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点についてどう克服しようとしたかを認知できる。

・目標 1)について

「FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているか」という点に関しては、「調べているうちにこの団体が取り組んでいると知ったので」や「テレビ番組で特集されていて知ったので」など、その団体や企業を訪問して調査する「必然性」にまで切り込んで意識化できている班が少なかった。これは、プレゼンのレトリックの問題でもあるが、どこに焦点を当てて自分たちが探究活動をしようとしているのかという目的を明文化できていない班が多かったと言える。この問題は中間発表の段階で見られたので、教員フィードバックでより詳細に指摘をし、結論から遡って目的を省察することや、テーマ選びの際に考えた具体的な内容を掘り起こすなどを促し、最終発表では「目的」として明確に述べることでできる班が増えた。「設立の目的や問題点」に関しては事前の調査や疑問と仮説の設定などの効果もあり、中間発表の段階でよく述べることができていた。団体・企業の方と直接会話を交わすことによって、その団体を肯定的にとらえることに繋がり、課題や問題点の共有、活動の目的に関しては強く共感できていた。一方で、あまりに共感する志向が強すぎて、研究調査、分析の対象としての客観化ができず、活動内容を SNS で発信するといった「アクションプラン」にとどまる班もあった。教員からのフィードバックとして「企業の広告塔になってしまうだけではないのか」という辛辣な言葉も使い、あくまでも社会的課題を解決する方法を考察するために客観視しなければならないと促した。しかし、生徒が訪問またはオンラインでインタビューをしたのは最大で 2 団体であるため、確かに客観化は難しく、どうしても訪問した FS 先と自身との価値観の同一化が起こることに課題を感じた。つまり、「学んだことを内在化して発表することができる」は達成しているものの、内在化にとどまり、普遍化まで至っていないと言えるのではないかと。これは、今後の目標設定の課題ともいえる。

・目標 2)について

対象の生徒は普段の授業でもロイロノートでの資料の提出や、意見の共有、プレゼン資料の作成を行っているため、作業としては難なくこなすことができていた。また、提出箱に提出したカードを共有することにより、コミュニケーションツールとしても活用できた。特に、発表スライドの共有とプレゼンに対する質問の共有は、実際にプレゼンが行われている短時間で考察が終わることなく、プレゼンの後もじっくりと見返して省察することができていた。また、プレゼンのスライドはパワーポイントまたはロイロカードでの作成を指示した。パワーポイントの「アニメーション」は効果的ではあるが、これに頼りすぎると装飾に力が入りすぎ、内容を訴える構成力にかけてしまうことが懸念された。中間発表、最終発表ともに、アニメーションは過度に取り入れず内容を以下に構成するのかに注力できたと感じられる。一方で、一部の班で中間発表時にイラストや色彩の過度な使用が見られたため、修正を促した。

・目標 3)について

フェーズ 1 と 2 の段階で「社会について知る」ことはある程度達成していた。また、その社会の中で自分がいかにコミットメントしていくことができるのかという点に関してもフェーズ 1 の川中大輔氏の講演で触れられており、生徒も主体性をもってこの授業に取り組み、「自分が」という主語を常に意識することができていたと言える。一方で、「実際にどうアクションに繋げるか」という点に関しては、その事例が「3 年生の KG PEACEMAP」しかなかったため、具体的なイメージが持ちにくかったのかもしれない。その結果、中間発表時では「SNS で活動を啓蒙する」というアクションプランが目立った。中には中間発表の段階で、「貧困は人権の問題なので、学校の人権の授業案を自分たちが作成して提案する」や「男女共同参画センターと連携して啓蒙活動に取り組む」など、具体的に自分たちが行動を起こし、成果物に繋げるプランを提示する班もあったが、教員フィードバックではより具体的なスキームを示し、実行できる段階にまで練りこむように伝え、最終発表ではどの班もある程度具体的な方法を提示するに至った。3 年生が作成した「KG PEACEMAP」の事例を知ったことは、生徒自身が企画して町の人々にインタビューを実施すること、歴史を学んだことが実際にフィールドに形として残っていること、AR 技術を活用してアプリケーションを作成することができること、紙の作成物を印刷するための本格的なデザインができること、それを印刷するのに必要な費用について企業から協賛を取り付けることができること、といった高校生として社会にどのようにコミットメントできるのかという実例を知ることができたのは彼らにとって希望に繋がり、自らのアイデアを広く刺激することができたのではないかと。

・目標 4)について

資料8「ポートフォリオ」の設問1では中間発表を経てフィードバックを得た際にどのように意識が変化したのかを問うた。その中で、「企業の取り組みを否定的な観点からも見つめてみることも重要だと思った」や「アクションプランを実現するための取り組みなのに、それが実現できると示すものが（プレゼンの中に）一つもないのは問題だ」など、自分たちが授業の中でどのような活動をしてきたのか、それをどのように位置づけることができるのかといったメタ認知がなされ、それを言語化することができている。また、設問2では中間発表から最終発表に向けてプレゼンの内容を改善する際にどのような問題点があったのかを省察させた。「企業で取り組まれていることを自分が実際に体験し、それを社会に広めたいと感じていたが、それでは、自分がどう活かして活動に繋げるのかにまで至っていない」ことに気が付く生徒や「仏教文化と貧困支援を結びつけるといった斬新なアイデアに感銘を受けたが、それが実際どのように機能しているのかを知りたい」といったさらに探究的な関心を示す生徒もいる。授業での取り組みの問題点を把握し、それを解決するためにさらに取り組みを継続したいという意欲が表れてきていることは、「克服しようとしている」姿勢であると評価できると感じた。

5. 今後改善すべき点

・この授業は探究学習の基本的なスキルを習得することだけでなく、実際に課題を見出し解決していく過程で市民として社会にコミットメントしていく価値観を涵養することを目指している。その点で前者は、グループワークやプレゼンテーションの作成、フィールドワークや振り返りといった一連の学習手法を習得することはできている。一方で、後者の価値観の涵養に関しては、それぞれのフィールドスタディの経験の違いや、どのようにプレゼン作成に関わったのかという違いが個人の達成度に影響を及ぼしている。協同的な学びにおける学習意欲の向上や、自己肯定感と帰属意識の確立という面では効果を得たが、一方で個人としていかに課題に向き合っているのかという尺度としては把握しきれないというのが現状ではないか。もちろん、資料8にみられる「ポートフォリオ」や各授業での「学びの記録」でその一端を伺うことができるが、一つの言説として成果物として提示されているものではないため、個の深まりが十分に計ることができたとは言えないのかもしれない。社会心理学的な統計の手法を用いて、生徒の意識の変化を計測する試みを取り入れるとより具体的な生徒の変化を掌握できるだろう。

・生徒に「より広範な視野で社会的課題を捉えさせ、具体的なアクションプランを作成させること」の難しさは昨年度より引き継いだ課題であった。そのため、フェーズ1で社会には広範な課題が潜在していることを意識させ、関心を促し、先輩の取り組みを実例として提示することアクションプランを具体的にイメージさせることを意図した。しかし、時間的制約もあり、すべてを網羅することはできず、また、アクションプランの実例も豊富に提供できたとは言えない。これまでの一般的な学習の中で必然的に身につけてきた生徒自身にある学習者としての姿勢は、やはり受け身が基本であり、それをいかに能動的な立場として学習と向き合わせるのかという点に引き続き課題を感じた。自分たちは学びを与えられるのではなく、自分たちが想起するイメージを実現するためのアシストを受けているのだという学習者としてのパラダイムシフトを促すための、「仕掛け」を考えていかなければならない。

<成績の算出方法について>

テストを行わない探究授業ではあるが、大学進学のための資料として成績を算出せねばならなかった。以下のように評価物を生徒たちの学びを2つに分類して評価し、配点調整を行い、100点満点で成績を算出した。

- 1) 生徒の授業内の学び/思考：40点
- 2) 生徒の成果物に関する学び/思考：60点

- ・パフォーマンス評価として「ポートフォリオ」を活用した。活動ごとの「学びの記録」という即時的なポートフォリオとより時間を経て省察する「Classi アンケート機能」を用いたポートフォリオとの二種を組み合わせ、生徒の様々な場面でメタ認知を促した。評価にはルーブリックを用いたが、これは生徒にあらかじめ提示することを意識し、学習の指向を明らかにすることでより効果的に教育効果に繋がるように意図した。ルーブリックの問題点としては、評価者が複数に亘ることによる揺らぎが指摘されてきたが、今年は昨年度の一例を共有し、できる限り評価基準を等化するようにした。評価者の一人からは「今年度は3年生を担当していたため、クオリティの違いが鮮明であった」との評があった。1年生対象の本授業では最終発表を一つの達成ポイントとしているため、その中で相対的にクオリティの高い生徒には良い評価を与えることになるが、それが3年間を通してどの程度の達成度に値するのかという相対的な視点に欠けていた。WWLC関連カリキュラムとして開発されてきている各授業を通して、生徒をどのように成長させていくのか、そのような観点で評価し、どの程度の達成を目指すのかという、大きな枠組みから逆算し、1年次の生徒の達成目標を明らかにしておく必要があるのではないかと感じた。関連科目の全体としてのカリキュラムマネジメントは意図され、綿密に連関を意図してデザインすることができているが、評価の側面から逆向きに設計する発達段階に応じた評価のデザインが求められるのではないかと感じた。評価の等化についても、具体的なルーブリック運用事例としてコンセンサスを取ることで、他の教科への探究活動の評価方法への指針となるのではないかと考えられる。
- ・この授業は教育課程として実施している時程には含まれず、放課後に開講している授業である。よって、参加を希望する生徒はそもそも意欲や関心が高く、また、他の授業の学習に支障がなく、学校生活に余裕を感じている生徒が多い。よって、元来備わっている資質・能力が高い可能性があり、取り組みによる評価もおのずと高くなる。他の授業と同様に成績に算入し、大学進学の資料として用いる関係で、教務規定の範疇にあり、絶対評価で成績を算出することができない。そのことにより、この授業に参加していない他の一般的な生徒に比べて能力が高く、成果物に対しても高評価を与えうるにも関わらず、授業に参加している生徒の中で相対的に評価を付けなければならないので、点数としては低く算出している場合がある。そういった生徒は、他科目の成績よりもこの授業の成績が目立って低い点数が付くことがあり、自己肯定感を失い探究的な学びに対する意欲が低下してしまうことがあるのではないかと懸念している。もちろん、上記の事情を生徒に口述し、通知される成績に対するリテラシーを持たせることを心掛けているが、成績に対する振り返りを行い、フォローアップしていく必要もあるかもしれない。

<グローバル探求 BASIC 資料>

資料1： 年間シラバス

2021年度 WWLC グローバル探求-BASIC 年間学習指導案

2022.03.14

<社会を知る・社会の中の自己を知る>

| 授業回数 | 日 | 担当者 | フェーズ目標 | 学習目標 | 授業内容(大項目) | 授業内容(小項目) | 準備物 | 授業時間外学習 | 提出物 | 評価対象 | | | |
|------|---|-------|--------|--|---|--|---|--|--|---------------------------------|-------------------------------|-------|-------|
| 1 学期 | ① | 5月18日 | 上田 塚本 | ・生徒たちがSDGsが身近な問題であること、自分たちの生活に結び付いていること、自分が大事だと大体理解できていること、 ・具体的なSDGsの問題が社会でどこで起こっているかを知っていること、 ・自分の関心がある程度はつきりしつつあること、 ・協働する集団作り、授業の雰囲気をつくること、 ・学びの記録ワークシートのねらいや記入方法を理解していること | ・SDGsの問題を「身近に起きていること」「自分ごと」として感じる ・トレードオフという概念を、身近なこととして理解する | 生徒発表 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | アイスブレイク トレードオフ・SDGs概念・ゲーム説明 ゲーム、オリジナルカード作り まとめと振り返り | カードゲーム 白紙の紙 黄色、青色カード 色紙 音楽・スピーカー | なし | 学びの記録 | 学びの記録 | |
| | | 6月1日 | 川中 | | | 社会的課題にはどのようなものがあるのかを知る ・市民として社会にコミットメントするとはどういうことなのかを知る ・社会的課題の取り組む団体・企業にはどのようなものがあるのかを知る。 | シディセッション教育 イノベーション実践 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | アイスブレイク/川中先生レクチャー 潜在している社会的課題について知る ペーパーで考えをシェアして理解を深める まとめと振り返り | 社会的課題の俯瞰図 ワークシート | なし | 学びの記録 | 学びの記録 |
| | | 6月7日 | 神任 | | | SDGsという言葉の意味を説明することができる SDGsの17のゴールについて説明することができる 同じグループのメンバーが考えるSDGsの優先順位と自分が考える優先順位の相違点/相違点を説明することができる | ガイダンス、SDGs入門 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | アイスブレイク/学びの記録ワークシート記入方法説明 SDGsの自分の価値観からみた優先順位づけ ペーパーで優先順位づけ/順位づけの判断根拠を共有 まとめと振り返り | 17SDGsのカード マナーボード 優先順位シート | なし | 学びの記録 | 学びの記録 |
| | | 6月15日 | 上田 塚本 | | | 関心のある社会的課題について書くことができる グループで考えを共有し、自分自身の価値観を明確化する | 社会的課題に関する理解 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 社会的課題が自分たちの知らない部分に潜むことを確認 グループで社会的課題について調べてまとめる クラス内でシェアして理解を深める まとめと振り返り | ロイノノート | 関心のある社会的課題について調べてくる | 学びの記録 | 学びの記録 |
| | | 6月22日 | 上田 塚本 | | | 関心のある社会的課題について言葉で説明することができる グループで考えを共有し、他者がどのように考えているのかに共感しめめることができる | 社会的課題に関する理解 関心のある学びの記録 グループワークの手法 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 関心のある社会的課題についての確認ポイントを確認 プレゼン まとめと振り返り | ロイノノート | プレゼンの準備 | 学びの記録 | 学びの記録 |
| | | 7月15日 | 能島 | | | 生徒が、自分の頭の中の想像と現実社会を結び合わせる ・身近なSDGsの課題「日本における子どもと高齢者の課題」について具体的に説明できる ・自分たちのまわりにもそのような課題が存在し、そのような課題の解決に実際に従事している先輩がいることを知る | 1 新聞 と 4 教育に 関したリアルな活動 実践を聞く | 0-15 15-30 30-45 45-60 | アイスブレイク/能島先生レクチャー ワーク（新聞の朗読）付録でグループワーク 話し合い ワーク（学びの記録） | マナーボード 付録 | テーマについて関心のある事例のニュースをロイノで提出・共有 | 学びの記録 | 学びの記録 |

| 授業回数 | 日 | 担当者 | フェーズ目標 | 学習目標 | 授業内容(大項目) | 授業内容(小項目) | 準備物 | 授業時間外学習 | 提出物 | 評価対象 | | | |
|-------|-------|---|--|---|--|---|---|--|--|--------------------------------------|--------------------------|-----------|-----------|
| 2 学期 | ② | 9月14日 | 上田 塚本 | ・生徒がいくつかのSDGsに対する自分の関心を探る ・生徒が地域（ローカル）の美社会で起きていることや地域の取組むべきことをフィードバックを主体的に知り、SDGsに関する理解を深める ・生徒がフィードバックにおける学びの手法を理解する ・生徒がフィードバック先を自分のフレームでもって切り取った実感を感じ、 ・生徒が社会との接点を自ら作り出す楽しさを知る | ・生徒が、自身の関心を探る、その関心と関わる団体や人々について調査を行う ・生徒が地域（ローカル）において、様々なSDGs（貧困・教育・平和、その他）の取組むべき活動や人々の活動を知る ・生徒が他の団体を知るのみに限らず、グループで協議して意思決定、発表準備を行う | 個人発表 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 1人45秒の発表（教員は評価/各発表後に短くフィードバック） *（生徒間の評価） 9つのグループ（4-5人）作り（作りは決まる生徒同士で） グループで行きたい団体を2つ選定（ロイノ発表資料作り） | 関心チャート | 関心チャート 発表資料（ロイノ） | 学びの記録 | 学びの記録 | |
| | | 10月5日 | 上田 塚本 | | | 生徒が、協働してフィードバックの発表を行う ・生徒が、他のグループの発表を聞き、他のフィードバックについての情報を得て、関心を探る | グループ発表準備 グループ発表 投票 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 発表準備 各グループ2分間で発表（教員/生徒間の評価、短くフィードバック） 自分が参加したいグループ2つ（A〜J）から投票、決定 （審判は教員で行い、後日Classで発表） | フィードバック発表シート フィードバック投票用紙 | なし | 発表資料（ロイノ） | 発表資料（ロイノ） |
| | | 10月19日 | 上田 塚本 | | | 生徒がフィードバックの発表を行う ・生徒が、フィードバックを踏まえて「観点」と「問い」について理解する | フィードバックの手法について学ぶ | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 授業内容説明、「観点」「問い」を理解するワーク/各自 「観点」と「問い」を理解するワーク2/構成案を 説明先についてネット調べ 「観点」「問い」についての調べ | 観点シート ロイノノート | なし | 学びの記録 | 学びの記録 |
| | | 11月10日 | 上田 塚本 | | | 生徒がフィードバックの発表を行う ・生徒がフィードバック先を自分のフレームでもって切り取った実感を感じ、 ・生徒が社会との接点を自ら作り出す楽しさを知る | フィードバックの目的について学ぶ | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 授業内容説明、「観点」「問い」を理解するワーク3 「観点」と「問い」をシェアする（前半の3期） まとめと振り返り | 観点シート ロイノノート | 「観点」と「問い」の決定ワークシートを完成させる | 学びの記録 | 学びの記録 |
| | | 11月16日 | 上田 塚本 | | | 生徒がフィードバックの発表を行う ・生徒がフィードバック先を自分のフレームでもって切り取った実感を感じ、 ・生徒が社会との接点を自ら作り出す楽しさを知る | 前週に発表した振り返りシートとワーク4 「観点」と「問い」をシェアする（後半の3期） まとめと振り返り | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 観点シート ロイノノート | 「観点」と「問い」の決定ワークシートを完成させる | 学びの記録 | 学びの記録 | |
| | | 1月11日 | 西宮 上田 塚本 | | | 3年生による「KG PEACE MAP」(ハンズオンラーニング)の紹介 ・自分たちが実行できるアクションプランの策定を知る | アクションプランの実例を知る | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 授業内容の説明、3年生の成果物を理解する意図 早くについているインスピレーション-動画を視聴 3年生による作成の過程と達成内容の説明 まとめと振り返り | 3年生の作成したワークシート KG PEACE MAP | なし | 振り返りシート | 振り返りシート |
| 3 学期 | ③ | 1月18日 | 上田 塚本 | 生徒がフィードバックの発表を行う ・生徒がフィードバック先を自分のフレームでもって切り取った実感を感じ、 ・生徒が社会との接点を自ら作り出す楽しさを知る | フィードバックの手法について学ぶ | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 情報処理方法の説明、観点は6つ リフレクション まとめと振り返り | 観点シート ロイノノート | 5年生までにロイノカード以下の6つの観点をグループでまとめるためのFSを準備できたこと FSで新しく知った知識がFSで分かった知能の人た 知能の人た知能の人た知能の人た知能の人た FSで知った知識がFSで分かった知能の人た 知能の人た知能の人た知能の人た知能の人た FSで知った知識がFSで分かった知能の人た 知能の人た知能の人た知能の人た知能の人た FSで知った知識がFSで分かった知能の人た 知能の人た知能の人た知能の人た知能の人た | 発表資料（ロイノ） | 発表資料（ロイノ） | 発表資料（ロイノ） | |
| | | 1月25日 | 西宮 上田 塚本 | 3年生による「KG PEACE MAP」を使ったフィードバック ・自分たちが実行できるアクションプランの策定を知る | アクションプランの実例を知る | 0-15 15-30 30-45 45-60 | KG PEACE MAPについての知識の確認 5年生の作成したワークシート まとめと振り返り | 3年生の作成したワークシート KG PEACE MAP | なし | 振り返りシート | 振り返りシート | | |
| | | 2月15日 | 上田 塚本 | 2学期のフィードバックで学んだことを内化化する ・以下の6つの観点について、フィードバックで得た学びを整理し、また、自分たちが起こすアクションを考え発表まで発展させる ①フィードバックで再確認できたこと（インターネットや書籍を通じて既に知っていたことを直接現場で確認することができた） ②フィードバックで新しく知った知識 ③フィードバックだからこそこ分かった現場の人の考え（思いや感情） ④フィードバックだからこそこ分かった現場の人の心が通ったこと ⑤フィードバックに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィードバック先の現場の人たが向かっている課題に対して、高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る | ・生徒が、6つの観点について発表を行うための情報を5つに整理する ①FS先の活動概要 ②自分たちの観点と問い ③FSで直接確認できたこと ④現場の人たはどのような課題をどのように解決していたか/それを聞いたこと ⑤自分が現場で確認できたこと ・生徒が、関心のある観点について学ぶ（以下記載） | 発表準備 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 発表の概要紹介・中間報告のスケジュール発表 中間報告の5つの発表項目説明、情報のまとめの作業 作業 最後に発表相互評価（フィードバック）の観点を説明 | ロイノカード | ・小教員1/2で中休み、昼休みを用いて発表準備 発表資料（ロイノ） | 発表資料（ロイノ） | 発表資料（ロイノ） | |
| 2月22日 | 上田 塚本 | 2学期のフィードバックで学んだことを内化化する ・以下の6つの観点について、フィードバックで得た学びを整理し、また、自分たちが起こすアクションを考え発表まで発展させる ①フィードバックで再確認できたこと（インターネットや書籍を通じて既に知っていたことを直接現場で確認することができた） ②フィードバックで新しく知った知識 ③フィードバックだからこそこ分かった現場の人の考え（思いや感情） ④フィードバックだからこそこ分かった現場の人の心が通ったこと ⑤フィードバックに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィードバック先の現場の人たが向かっている課題に対して、高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る | ・生徒が、6つの観点について発表を行うための情報を5つに整理する ①FS先の活動概要 ②自分たちの観点と問い ③FSで直接確認できたこと ④現場の人たはどのような課題をどのように解決していたか/それを聞いたこと ⑤自分が現場で確認できたこと ・生徒が、関心のある観点について学ぶ（以下記載） | 発表準備 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 発表の概要紹介・中間報告のスケジュール発表 中間報告の5つの発表項目説明、情報のまとめの作業 作業 最後に発表相互評価（フィードバック）の観点を説明 | ロイノカード | ・小教員1/2で中休み、昼休みを用いて発表準備 発表資料（ロイノ） | 発表資料（ロイノ） | 発表資料（ロイノ） | | | |
| 3 学期 | ④ | 2月26日 | 上田 塚本 西宮 泉川 穂川 茂雄 | 2学期のフィードバックで学んだことを内化化する ・以下の6つの観点について、フィードバックで得た学びを整理し、また、自分たちが起こすアクションを考え発表まで発展させる ①フィードバックで再確認できたこと（インターネットや書籍を通じて既に知っていたことを直接現場で確認することができた） ②フィードバックで新しく知った知識 ③フィードバックだからこそこ分かった現場の人の考え（思いや感情） ④フィードバックだからこそこ分かった現場の人の心が通ったこと ⑤フィードバックに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィードバック先の現場の人たが向かっている課題に対して、高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る | ・生徒が、6つの観点について発表を行うための情報を5つに整理する ①FS先の活動概要 ②自分たちの観点と問い ③FSで直接確認できたこと ④現場の人たはどのような課題をどのように解決していたか/それを聞いたこと ⑤自分が現場で確認できたこと ・生徒が、関心のある観点について学ぶ（以下記載） | 中間報告 | 0-15 15-30 30-45 45-60 | グループ6つによる発表 同上 グループ6つによる発表 同上 | ・模擬授業 ・学びの記録（相互評価表） | 発表資料（ロイノ） 相互評価表 | 相互評価表 教員評価表 | | |
| | | 3月9日 | 上田 塚本 | 2学期のフィードバックで学んだことを内化化する ・以下の6つの観点について、フィードバックで得た学びを整理し、また、自分たちが起こすアクションを考え発表まで発展させる ①フィードバックで再確認できたこと（インターネットや書籍を通じて既に知っていたことを直接現場で確認することができた） ②フィードバックで新しく知った知識 ③フィードバックだからこそこ分かった現場の人の考え（思いや感情） ④フィードバックだからこそこ分かった現場の人の心が通ったこと ⑤フィードバックに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィードバック先の現場の人たが向かっている課題に対して、高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る | ・生徒が、6つの観点について発表を行うための情報を5つに整理する ①FS先の活動概要 ②自分たちの観点と問い ③FSで直接確認できたこと ④現場の人たはどのような課題をどのように解決していたか/それを聞いたこと ⑤自分が現場で確認できたこと ・生徒が、関心のある観点について学ぶ（以下記載） | 再解釈と再構築① | 0-15 15-30 30-45 45-60 | 発表の概要紹介・動画をしながらワークシート記入 動画をしながらワークシート記入 動画をしながらワークシート記入 意見を共有する | ・中間発表の動画（Class） ・ワークシート | 振り返りシート 振り返りシート | 振り返りシート 振り返りシート | | |
| | | 3月14日 | 上田 塚本 泉川 田中 | 2学期のフィードバックで学んだことを内化化する ・以下の6つの観点について、フィードバックで得た学びを整理し、また、自分たちが起こすアクションを考え発表まで発展させる ①フィードバックで再確認できたこと（インターネットや書籍を通じて既に知っていたことを直接現場で確認することができた） ②フィードバックで新しく知った知識 ③フィードバックだからこそこ分かった現場の人の考え（思いや感情） ④フィードバックだからこそこ分かった現場の人の心が通ったこと ⑤フィードバックに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィードバック先の現場の人たが向かっている課題に対して、高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る | ・生徒が、6つの観点について発表を行うための情報を5つに整理する ①FS先の活動概要 ②自分たちの観点と問い ③FSで直接確認できたこと ④現場の人たはどのような課題をどのように解決していたか/それを聞いたこと ⑤自分が現場で確認できたこと ・生徒が、関心のある観点について学ぶ（以下記載） | 最終プレゼン | 0-15 15-30 30-45 45-60 60-75 75-90 90-100 | 発表① 発表② 発表③ 発表④ 発表⑤ 発表⑥ | 発表資料（ロイノ） | 相互評価表 相互評価表 | 相互評価表 相互評価表 | | |
| | | 3月14日 | 上田 塚本 泉川 田中 | 2学期のフィードバックで学んだことを内化化する ・以下の6つの観点について、フィードバックで得た学びを整理し、また、自分たちが起こすアクションを考え発表まで発展させる ①フィードバックで再確認できたこと（インターネットや書籍を通じて既に知っていたことを直接現場で確認することができた） ②フィードバックで新しく知った知識 ③フィードバックだからこそこ分かった現場の人の考え（思いや感情） ④フィードバックだからこそこ分かった現場の人の心が通ったこと ⑤フィードバックに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィードバック先の現場の人たが向かっている課題に対して、高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る | ・生徒が、6つの観点について発表を行うための情報を5つに整理する ①FS先の活動概要 ②自分たちの観点と問い ③FSで直接確認できたこと ④現場の人たはどのような課題をどのように解決していたか/それを聞いたこと ⑤自分が現場で確認できたこと ・生徒が、関心のある観点について学ぶ（以下記載） | 最終プレゼン | 0-15 15-30 30-45 45-60 60-75 75-90 90-100 | 発表① 発表② 発表③ 発表④ 発表⑤ 発表⑥ | 発表資料（ロイノ） | 相互評価表 相互評価表 | 相互評価表 相互評価表 | | |

記録日 _____

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

_____ 年 _____ 組 _____ 番 氏名

| 本日の授業で知った新しい知識（事実） | 他者や自分の考え・意見 |
|--------------------|-------------|
| | |

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

記録日 1/25 (火)

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

1 年 G 組 24 番 氏名

| 本日の授業で知った新しい知識 (事実) | 他者や自分の考え・意見 |
|--|---|
| <p>①ワールドスタディで再確認はゴ 25年デフレの日本 程気が悪いと貧困に+コトでしんどくに タシボールの数②</p> | <p>子どもの貧困問題の実態を 知りたくて訪問した。今は2人 ①(山) 責任をかんじた。②(山) コト前は20人 ③(山) ボランティアとしてくれる人がいる から成り立っている。</p> |
| <p>②宣伝(CM)ではなくポスターや母親のロコミでなす。 手づきか簡単メールアドレスを送ればできる。 1700の専売店からでもメルリのとめいで配達 LINE。(メールアドレスを持っていない人のため) 大胆な宣伝をしていないため、ボランティアが集まり にくい。 季節感の感じられる内容</p> | <p>④(山) とても役立つ。「支えられて 1人じゃないんだ」と感じた。 ⑤(山) 新しい宣伝のかたち ⑥(山) 自分がよければそれでいい という「個人主義」「資本主義」の考え方のせいかな? 宗教的な思想もかんじているか?</p> |
| <p>③(山) 利他心に触れる所がおてらおやつくらぶジ モお母さんに届ける お坊さんがたすけられるのは宗教的にむずかしい 母子が被災したというニュースをみて、立ち上がった。 日用品も配達。 支えられている。見守られている→一筋の光 支援が増えている。支援をさせてくれてありがとう と支援者が言う。</p> | <p>④(山) 親が 子どものプレレキ年代からななくて 何を送ったらいいかわからない ⑤(山) 筋絶でいらない考えが「ステキ システムを改良 考え方にとらわれない」 何事にもチャレンジ!! みんなと話し合って (1人でがんばらない) 余裕のある世帯からのメールかもしれないが、 石巻にはさすがに即日配達 市役所の窓口相談は時間がかかる</p> |
| <p>④ボランティアの参加人数② 宗教にとらわれない、天理教の信者の方もきていたが コトの準備で定員が10人以下に。 メイドレーや電話が切れたりお母さんとコミュニケーション がとれなくなる。 賞味期限ギリギリのものが送られてきて、はいき。</p> | <p>⑤(山) 家族やしやの代受のない話 これが目指すボランティア像...? ⑥(山) 多様性の中で自由がきく 「民主主義」社会の中でも大切なこと 日本の政治家は高齢者向けの政策ばかり "色々な人がいる"ということをもっと理解できる社会 づくり。</p> |

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

資料4：「フィールドスタディに向けた観点と問いの設定」ワークシート

フィールドスタディに向けた“観点”と“問い”の設定

| | | |
|-------|------|-------|
| グループ： | 訪問先： | メンバー： |
|-------|------|-------|

訪問先について、インターネットや文献でわかっていること

自分達がヒアリングする時の“観点”

| |
|---------------------------|
| 観点：私たちは、 の観点からヒアリングを行う |
|---------------------------|

ヒアリングをする際の“問い”（文末を必ず？にする）

| |
|----|
| 1) |
| 2) |
| 3) |

グローバル探求BASIC 中間発表会 学びの記録 (相互評価表)

月 日

組 番 氏名

※これは相手のプレゼンを評価することで、評価者みずからがどのような事に気が付いたのか、どのような事に疑問をもつことが出来たのか、を記録するためのシートです。

| | | | | | | |
|--|-------|-------|-------------------|-------|-------|-------------------|
| 観点① F5先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。 | G () | 評価【 】 | 疑問に思ったこと・意見・アドバイス | G () | 評価【 】 | 疑問に思ったこと・意見・アドバイス |
| A どのような問題意識(きっかけ)でF5先を選定したのか、訪問の目的(何を知りたかったか)が明確である。 | | | | | | |
| B F5先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。 | | | | | | |
| C F5先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。 | | | | | | |

| | | | | | | |
|--|-------|-------|-------------------|-------|-------|-------------------|
| 観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。 | G () | 評価【 】 | 疑問に思ったこと・意見・アドバイス | G () | 評価【 】 | 疑問に思ったこと・意見・アドバイス |
| A (当事者の声)が明確である。 | | | | | | |
| B 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「何を語ったのか」(当事者の声)が見えにくい。 | | | | | | |
| C F5先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。 | | | | | | |

| | | | | | | |
|--|-------|-------|-------------------|-------|-------|-------------------|
| 観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。 | G () | 評価【 】 | 疑問に思ったこと・意見・アドバイス | G () | 評価【 】 | 疑問に思ったこと・意見・アドバイス |
| A 当該テーマについて何ができているかが具体的にであり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。 | | | | | | |
| B 当該テーマについて何ができているかが具体的に示きされているが、それが実現できることが証明できていない。 | | | | | | |
| C 何ができているかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。 | | | | | | |

他の人が訪れたF5先は自分の想像していた通りの施設でしたか？現場の人たちの「課題」に思いもよらなかったリアリティを感じましたか？「気づいたこと」をまとめよう。

| | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|
| | | | | | | |
|--|--|--|--|--|--|--|

グローバル探求BASIC 中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】

| | |
|----------|--|
| 動画のグループ名 | |
|----------|--|

| | |
|---------------------------------------|--|
| 観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。 | |
| A | どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。 |
| B | FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。 |
| C | FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。 |

□発表者の問題意識は何ですか？

□発表者の訪問の目的は何ですか？（観点と問い）



☆この2つは一致していると本当に納得できますか？「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

| | |
|--|--|
| 観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。 | |
| A | 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。 |
| B | 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。 |
| C | FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。 |

□施設設立の目的/目標/取組は何ですか？

□現場の人たちの具体的な問題点/課題は？

□現場の人たちのリアルな「声」はどんな「声」？

| | |
|--|--|
| | |
|--|--|

☆この3つの項目は、ストーリーとして

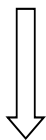
分かりやすくつながっていますか？

「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

| | |
|--|--|
| 観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。 | |
| A | 当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。 |
| B | 当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。 |
| C | 何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。 |

□ <振り返り> 当該テーマ/問題意識/訪問目的

□ 提案内容 (What/Who/Where/When/Why/Which+How)



☆この2つにつながりを感じますか? 「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか?

☆どこを工夫すれば実現可能性はもっと上がる?

□ グループのまとめ

☆発表のハイライト☆

□ 発表全体の中で、一番伝えたいことが伝わってきた場面、一番発表内容に魅力を感じた場面 / どのような要素がそうさせていた?

場面
(分、内容)

要素

■ 発表全体の中で、一番工夫や改善が必要な場面、一番理解ができなかった場面 / どのような要素がそうさせていた?

場面
(分、内容)

要素

観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

- A スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
- B スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
- C スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

□一番効果的だと思うスライドは何枚目？/どんな点が良い？

枚目

■工夫を必要とするスライドを2つ挙げよう/どう工夫する？

枚目

枚目

観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

- A 発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
- B 発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
- C 情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

※自分の発表のみコメントしよう

■自分の発表の仕方について、工夫すべきところはどんな点？

設問1：【意識の変化について】

他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思っていたのと違う!」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。(400字を目安に)

- 私達は最初、企業の行なっている活動を細かに調べることで、それらを生かして企画が作れるだろうと思い、企業について沢山調べ、インタビューしました。そして、それらによって得た情報をプレゼンや原稿に沢山盛り込みました。しかし、「それではPanasonicの宣伝をする人になってしまうよ。」と言われ、はっとしました。企業の活動を細かに調べることも、それも確かにとても大切です。しかし、今、企業が行なっている、とはいえ、それらのプロジェクトが完璧とはもちろん限りません。むしろ、否定的な観点からプロジェクトを見つけることも重要になってくるのだろうと感じました。そして、その穴をどのように埋めるか、私達が考えて提案し、そこからSDGsの輪が広がっていくこと、これが1番の理想型だと思いました。他にも、プレゼンにおいては、あまりデザインをしすぎてはいけないと言われている班があり驚きました。見ている限りでそんなごちゃごちゃはしていないかなと思っていて、ダメ出しがあったので、本当に必要な情報を簡潔にまとめるスキルの大切さを改めて痛感しました。
- 少々下記のものと同様の可能性があるが、以下が考えさせられたことである。①私達がおてらおやつクラブに訪問した理由について、そこに訪問しなければならない必然性のある理由が必要であったという指摘 ②アクションプランの実現性を示しているかという観点の欠如 ③お母さんの声と現場の声の区別ができていないといった問題 ①について、おてらおやつクラブにしか当てはまらないものは、このプレゼン内で「寺院とnpo法人という特異性への関心」と言っていた。個人的に、これはその必然性を示すと考えていたが、すこし説明が蔑ろになっており、私達のもつ「仏教精神がどれほど貧困支援につながるのか」という興味が見えにくいかもしいろいろ考えるようになった。②は、確かに内容やその効果については足りないもののそこそこは述べられていた。発表前はこれで万全だと思っていた。しかし、この授業の目的はアクションプランを実現することであるにも関わらず、それができると示すものが一つもない。これは確かに大問題であると後々気付かされた。③は確かにそうである。お母さんと当事者では立場が違うのでそれを明確にしておかないと聞き手は困惑の一途を辿ることとなる可能性がある。この判断を聞き手まかせでいいと思っていた私たちがいたのではないだろうか。
- 訪問の目的やなぜその企業をFS先に選んだのかといったことをはっきり明確にすることが大切というのは前から教えられていたが、今回の中間発表で他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスを聞いて、ここまで明確に詳しく言わなければならないのかと思った。訪問の目的が弱いという指摘は前から受けていたがどう詳しくすれば良いかわからなかった。中間発表で私たちの班がどうダメなのかよくわかって良かった。中間発表の時は、私たちはアシックスのような企業とは違って環境問題改善に直接貢献することはできないため、アシックスの取り組みをSNSで紹介して参加を呼びかけることくらいしかできないと考えていた。しかし、先生方からアドバイスや評価をもらって、アシックスの取り組みから私たちがオリジナルに考えた取り組みを提案しなければならなかった。また、先生方からのフィードバックや他の班の人からの質問を見て、私たちの中間発表の「私たちにできること」は具体性がなかったと思った。"なぜそれを実施するのか?どのように実施するのか?"という質問に対して答えることができなくて、そこまで詳しく考える必要があるのかと思った。
- 1つ目は、JALスカイ大阪の取り組みは本当に他に類をみないのか、というご指摘です。この範囲の原稿は私が担当したのですが、私の悪い癖である、とりあえずプレゼンは「何何は何何だ」と簡潔に強調させたいだろうという考えがもたらしたなと思いました。2つ目は、JALスカイ大阪の取り組みを発信することは労働環境に対する関心を高める一つの手段に過ぎず、それを最終目的にするのはおかしいという先生のご指摘です。今思えば、指摘いただいた流れは頭では分かっていたのですが、企業とタイアップした広報の取り組みが一番インパクトが強いのでとりあえずそれを際立たせとけばいいだろうという安易な考えからあのような発表に至りました。発信者の頭ではわかっているけれどもそれは口に出さないと聞いている人には伝わらない、というプレゼンの根本的な意義を確認できてよかったです。

設問2：【問題点の克服】

現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましよう。(400字を目安に)

- 私達の班は、環境問題に関心がある班で、主に地球温暖化などを問題として意識しました。その上で、暮らしにSDGsを組み込んだ活動をしている藤沢市スマートタウンの活動に辿り着き、インタビューさせていただきました。そこについて調査中に、環境問題だけではなく、しっかり住民は快適に過ごせているのか？宣材写真に写っている家はどれもこれも似てしまっているけれど、太陽光パネルを設置するために、それは仕方ないことなのか、という住民側に起こりうる暮らしに関する問題も浮かび上がってきて、そのように社会問題にアプローチしよう！という志の元生まれた活動だとしても、必然的に問題が起こってしまうのだなと感じ、それらに対して解決方法を考えました。私達は、Panasonic以上にサステナブルで、更に個性豊かな街づくりを夢見て、まず学びを深めようとスマートタウンで行われているイベントに参加することを考えました。そこで得たことを活かして、世間に広める重要性を感じたのです。しかし、それでは主体的とは言えない、そこからどう活かすのか？を先生が指摘してくださったので、主体的な活動としてバザーを提案しようと班内の振り返りで話が出ました。それについて最終発表でお話しさせていただこうと思っています。
- まずスライドが文字数が多く見にくかったのでアニメーションや文字を少なくしレイアウトを変えました。自分達が実際に行ったおてらおやつクラブ様でのボランティア活動の感想や考えたことを自分達が提案したアクションプランと結びつけて伝えようと思いました。また現場の人の抱えている課題とお母さんが抱えている課題が複雑に絡み合っていたので内容をわかりやすくしました。アクションプランに関しては、もっと具合的な方がいいとおっしゃっていたのでできるだけ詰めていきたいと考えています。なぜおてらおやつクラブ様にしたのか、またなぜそこに小駄をやるのが薄かったので自分達の目的とおてらおやつクラブ様の活動をつなげて、具体的かつ深く伝えたいです。自分達が考えたことと団体の方が行ったことへの感想との違いが分かりにくく自分達が伝えなかったように相手に伝わっていなかったので工夫して伝えたいなと思いました。自分達の班にしかないポイントやインパクトをつけつつ、発表の仕方やスライドのレイアウトにも気を配って中間発表よりも良い発表ができるようにみんなと協力していきたいです。
- 私の発表の課題はフィードバックに鑑み、主に以下のものが挙げられる。①アクションプランの詳細と私たちの想い、その活動によって生じる効果については説明ができていたが、その実現性が示されていないこと②データ等の具体的なエビデンスの乏しさ③訪問先がおてらおやつクラブでなければならないという独自性ある理由の欠如①、②、③を踏まえ、他のメンバーと意見を出し合いながらその他のメンバー担当のパートとの相互連携を図り一体感のある発表を目指して次のような対策を練った。対策①子どもの貧困問題という「人権教育」プログラムの授業案を以下のように設定し、八尋先生にそれを提出。その後このプレゼンが示すすべての観点から説明、議論を行い、実現を目指す。この内容を加える。(1)子どもの貧困の現状の講義→(2)その講義で感じたことを自分のワークシートで整理→(3)それをグループ内で共有→(4)それぞれグループ内で自分達ができることを考える。→(5)ワークシートでプログラムの総体に関する自分が感じたこと等を整理 ※ワークシートは八尋先生と協力して作成(教材はそのワークシートとする) 対策②1年単位での日本の子供の貧困率の増減を示すグラフを発表時に提示する。対策③訪問理由の、「寺院X貧困支援という珍事もつインパクト」について、以下のような説明を追加する。・「お供え物」という仏教文化と貧困支援を結びつけるといった斬新なアイデアに感銘を受け、それが実際どのように機能しているかということにも関心を持ちました。
- 私たちの班のテーマは労働環境と決まっていたのですが、労働環境の何に注目してこのテーマにしたのか？と言うことが、プレゼンを考えていく中であやふやになってきているので、もう一度軸を考え直し、ブレないようにしていくことが1番大切だと思います。アクションプランとして、他の班も悩んでいると思いますが、私たちはInstagramを挙げましたが、インスタグラムで何をあげるのか、労働環境への改善のために自分達が今からでもやっつけていけることが、序盤の方で止まっているので、少しずつ実現可能なことへとどうさせていかなければいけないと思いました。

資料9：最終発表パワーポイント資料

G6 テーマ「子どもの貧困」FS先「おてらおやつクラブ（奈良県）」題目「利他心の心に触れる」

おてらおやつクラブ
利他心の心に触れる

利他心とは
他人の利益を重んじ他人が利益を得られるように振る舞おうとする心

日本の貧困問題の現状
7人に1人の子供が貧困家庭

訪問目的
「日本の苦しむ子どもたち、家族がいるという社会の現状知り行動する
私たちはどのような意識改革をおこなうべき？
→ヒントを探る」

なぜこの団体に興味を持ったのか
興味を持った共通の課題→子どもの貧困問題
なぜ？→当事者と年齢が近いのに身近な視点がない
そんな時に「おてらおやつクラブ」を紹介して本に出会う
印象に残った理由
・寺院が運営するNPO法人
・お供え物を活用→オリジナルティ

活動概要
2013年の大阪の母子殺害事件がきっかけ
【目的】
・貧困家庭等に対してお寺に提供された食料・日用品などを受け入れ神様からのお下がりとして配給
・振動活動
・貧困問題に関する啓発活動
・子どもの支援
※地域社会が寄り添いながら子どもの貧困問題の解決に寄与する

現場の人が抱えている課題と対策
あたらぬおてらおやつクラブの課題
・実現しているお寺の数の少なさ、継承の難しさ
・食料の確保、確保
・地域の支援と繋がっていない貧困家庭→見えない貧困問題
・個人情報の保護→個人情報の管理

コロナ禍での課題と対策
お寺さんたちの課題
・収益がなくなる
・スマートフォンで食費光熱費？
・仕事がなくなる
→メンバーでの話し合いは毎日自粛
おてらおやつクラブの課題
人不足(ボランティアの減少)

自分たちが考えたこと
①メルカリの匿名配送やLINE等の身近なツールを利用
②自分達の不利益よりも本意に困っている人に対して迅速な対応をすること→**人間的な部分**
③ボランティアに関する人出不足解消
→私たちがボランティア活動を通じて貢献
→高等部内でのネットワークを通じて広める

現場の声
②お寺さんの方の声
「支えられているという実感が湧いた」「ひとりじゃないと思えた」「見守ってくれる人がいると嬉しくなった」

現場の声
③支援している人たちの声
「支援させてくれてありがとう」「何かしたいと思ったから支援できて嬉しい」
→困っている人を助けたいだけでなく、支援してほしいけど行動できない人の利他心を受け止めてくれる団体

OUR ACTIONS
利他心=関西学院のスクールモットー「Mastery for Service」

ACTION 1
高等部内で「子供の権利デー運動」を実施
・礼拝や人権教育などを利用して現状を理解してもらう
・人権教育等でグループワーク等を実施
自分が何ができるかを能動的に考える
ボランティア運動、寄附運動に貢献し始める

ACTION 2
「ボランティア活動参加イベント」の実施
・各クラスごとにそれぞれボランティア団体の活動に参加
見えたかったものが見えてくる
EX)貧困問題の「表面的でない本質的な部分」など

訪問したからこそ分かったこと
利他心を持ち他人の利他心を受け止めることの大切さ
自分達の不利益となることでも助ける
関学のモットー「Mastery for Service」がボランティア活動でも必要

訪問したからこそ感じたこと
「利他心」を胸に、ボランティアにより一層参加
貧困問題に取り組んでいる団体をさらに応援
↓
他人の利他心を受け止めて感じてほしい

G1 テーマ「環境問題」FS先（オンライン）「Panasonic」題目「持続可能なまちづくり—FujisawaSSTから私たちの街へ—

持続可能なまちづくり
—FujisawaSSTから私たちの街へ—
1班 若田真純 上田優楽 田中さち

西宮市のCO2排出量
産業部門の割合が少なく、民生家庭部門が多くを占めている
→住宅都市としての特徴

CO2排出量増加の要因
・人口の増加
・家電製品の所有台数の増加
・ライフスタイルの変化
→市民一人ひとりの意識、行動の改革が必要

オンラインインタビュー 調査結果 Panasonic

目標①生活水の30%削減
達成○
生活用水を節水可能なインフラを整備

目標②CO2の排出量70%削減
達成○
1990年よりも85%削減

目標③再生可能エネルギーの利用率30%以上
達成○
・天候に左右される
・集合住宅では50~60%、全体では30%

一般的なお家の太陽光パネルの発電量
→435kWh/月
→戸建ての消費電力量
→390kWh/月
→15階建マンションの消費電力量
→1725kWh/月

課題
今後14-15階建てのビルの建設も予定
屋上に設置された太陽光パネルだけではビル1階分の電力をまかなえない
現在は目標を達成できているが今後達成できなくなってしまうかもしれない

対策
・戸建て住宅で生産された電力の余剰分を集合住宅や商業施設に供給
・住居一人ひとりの省エネ意識を向上
・自然のエネルギーを最大限に活用

自然のエネルギーを最大限に活用
・住宅の断熱性を高める
・海風をうまく取り込む
・エアコンの稼働率を下げる

問い
プロジェクト設立時に掲げていた、環境・エネルギーに関する目標は、実際は現時点でのくらい達成されているのか。
→実現可能な目標を立てる目安に

問い
タワマンに統一感と個性のある景観形成とあるが、その両立はできていないのではないか。住宅デザインに個性を求めるとは今のスマートシティには向かないのではないか。

現デザインの理由
✓環境配慮のデザイン
✓統一感と個性のバランス
✓藤沢市の規定元々高い引き継ぐ
✓共通するビジョン・共有された価値観

統一感と個性のバランス (×両立)
区画ごとのデザイナーマ
→街の資産価値に繋がっている

共通するビジョン・共有する価値観
パートナー企業、藤沢市の官民、街に関わる全員が一体に
→調和のとれたまちづくり

街の完成図=共通するビジョン

ルールに不満+共有された価値観

デザインを統一
○ 共通するビジョン
× 共有する価値観

タワマンの改正
・壁の色はナチュラルカラー
・屋根の色は彩度低く
→環境配慮に関係のない部分

課題
住民の中にはルールを借助に感じている人があるかも知れない
→今後住民から意見が出た場合は変更も検討!

CO2排出量増加の要因
・人口の増加
・家電製品の所有台数の増加
・ライフスタイルの変化
→市民一人ひとりの意識、行動の改革が必要

市民、事業者のどちらも地球温暖化対策に関する情報特に取り組みの結果に関する情報の提供を希望している


アクション「政策提言」
SSTを参考に、西宮市民にエネルギーの利用状況を可視化して、通知するシステムを構築する
意識が変わっても行動が変わらなければ意味がない
分りやすいメリットをつくる

アクション「政策提言」
SSTを参考に、西宮市民にエネルギーの利用状況を可視化して、通知するシステムを構築する
自分たちの考えエネルギーの消費量やCO2の排出量削減に貢献した市民に、地元のお店で利用できるポイントを付与する

高等部での実証実験
「エコチェックリスト」
✓照明こまめに消す
✓エアコン2度
✓窓を開ける

地球温暖化の防止と地球経済の活性化がどちらも実現!!

グローバル探究BASIC 中間報告フィードバック

| | |
|--------------|---|
| 発表グループ：グループ1 | 発表タイトル：環境配慮型のまちづくり—FujisawaSST— |
| メンバー： |  |

【各項目に対する評価とフィードバック】

| | |
|-----|--|
| 観点① | FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。 |
| A | どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知らなかったか）が明確である。 |
| B | FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。 |
| C | FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。 |

- 1枚目 班名とメンバーだけでなく、「発表のタイトル」を決めよう。上記は先生が仮に作った「タイトル」です。自分たちがこのプレゼンで何を伝えたいのかを「タイトル」にしましょう。
- 2枚目 なぜ藤沢スマートタウンについて調べようと思ったのかという「理由」が「ニュースで見つけたから」では、「自分たちが何を解決しようとして訪問（調査）したのか」といった「目的」がはっきりしておらず、「環境問題について興味をもってたまたまニュースで見たから」ということになります。つまり、「目的意識」としての説明として希薄であるという印象を与えています。
- 3枚目 パナソニックがライフスタイルを提案し、必要なインフラやコンテンツを創出していこうとしている、通常との順序の違いについて説明できていますが、この点は非常に重要な点ですので、もう少し丁寧に述べても良いかもしれません。例えば、「従来の都市開発」の例と比較することで、SSTがいかに特別であるかを説明することができます。甲東園もまずは電車、駅ができて浄水場ができて電気がきて、という歴史があります。山を削り、海を埋め立てる現在の都市開発もおそらくはそのような「インフラストラクチャー（インフラ）から整備されていくはず」です。
- 4枚目5枚目 「まだ計画段階なのは？」という問いはあまりに短絡的なので、あえてここで述べる必要はなさそうです。「現時点でどのくらい達成されているのか」を知ってどうするのか、が「目的」ですね。

| | |
|-----|--|
| 観点② | 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。 |
| A | 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。 |
| B | 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。 |
| C | FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。 |

- 6枚目7枚目 「どのくらい達成されているのか」の答えを数字で聞いて「生活用水30%」「CO₂70パーセント」という情報の紹介の仕方に工夫があってもよいのではないのでしょうか。
- 8枚目 内容としてはよくまとめられています。スライドの書き方としてももう少し工夫が必要です。
- 10枚目～14枚目 現場の人たちが具体的に語った「課題」のポイントがよく説明できています。さらに、「戸建てで使用する電力量」と「一般的な家庭に設置された太陽光パネルの発電量」、「15階建ての建物で使用する電力量」を調べ、どれほど足りないのかパナソニック以外のデータでも構わないので具体的な数値で明示できると良いでしょう。「アクティブなCO₂の削減」とはどのような点が「アクティブ」なのかを説明してみよう。
- 17枚目～24枚目 「タウンルールの統一と個性のある景観形成の両立」についての問いは非常によいポイントです。しかし、パナソニックからの回答をそのまま紹介するだけでなく、その「回答」では解決しきれていない部分もあるのではないかと鋭い視点で指摘してみてもどうでしょうか。例えば、「共通するビジョン・共有された価値観」がいわゆる「機能」面ではなく「装飾デザイン」面を統一することにどれだけ意味があることなのか、「パナソニックホーム」という住宅メーカーが提供する住宅は他の住宅メーカーに比べ

て環境性能が高いと言えるのかどうか。など、証拠をあげて反駁しても良いかもしれませんが、そこから、「緩和すべきルールとはどのようなルールか」も考えられるのかもしれませんが。

| | |
|---|---|
| 観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。 | |
| A | 当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。 |
| B | 当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現可能であることが証明できていない。 |
| C | 何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。 |

- 26枚目～ 「宣伝活動」とありますが、パナソニックの広報活動に参加することで「誰に何を訴えたいのか」が明確ではありません。「生産電力を上げるために必要な人の力」に繋がっていくという点ももう少し具体的な「行動」として考えてみる必要がありそうです。
- 27枚目～ 「SSTを訪問する」ことはあくまでも「調査」の目的であり、このことを学んだ君たちがその「調査」を通したさきにある「行動・アクション」ではありません。行って、SSTのを知ることがアクションであるというのでは、ただフィールドスタディをしているだけです。課題を解決するために今回の調査を経て自分たちがどのような活動に繋げることができるのかを考えましょう。

【教員からのフィードバック統括】

Fujisawa SSTに着目して環境配慮型の「まちづくり」について考察しようとしている点についてはよく調査できています。しかし、エネルギー問題を太陽光パネルで、という内容が前面に出てきていますが、これなら取り立ててSSTで説明する必要性を感じません。それよりも、SSTに限らず多くの一般家庭に太陽光パネルを設置する取り組みをしたほうがよさそうです。このSSTがなぜ環境配慮型のまちづくりとして意味があるのかをもう少し深く考えてみてください。AIの活用や住民どうしの繋がりなど、多くの重要なキーワードが見つかりそうです。例えば、近年は戸建て住宅の場合、自治体による連携はゴミステーションの運営や祭りなどの行事などに限られています。戸建て住宅に住む街の人々がそれぞれ所有する住宅の機能によって「環境を配慮する」ために連携し、情報を公開しながら意識するといった取り組みは他にはありません。SSTはそのような「環境に配慮しよう」と考えている人々が自ら進んで住もうとして集まってくるので実現ができるのです。では、このSSTの取り組みを一般的な地域社会に生かしていくにはどのような工夫や取り組みが必要なのでしょう。そこに、あなたたちのような「パナソニックの会社員」でない第三者の「知恵」が必要なのではないでしょうか。しかも、その「知恵」の中に、あなたたちが行動に起こせるような内容があればさらに素晴らしいでしょう。「SSTにおける試行を社会で実現するために必要なこと」を行政に提案するような「政策提言」を作成するなど一つです。

グローバル探究 BASIC 最終発表フィードバック

| | |
|-----------|--|
| 発表グループ：G1 | 発表タイトル：持続可能なまちづくり—FujisawaSST から私たちへの街へ— |
|-----------|--|

【各項目に対する評価とフィードバック】

| | |
|---------------------------------------|--|
| 観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。 | |
| A (5点) | どのような問題意識(きっかけ)でFS先を選定したのか、訪問の目的(何を知りたかったか)が明確である。 |
| B (4点) | FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。 |
| C (2点) | FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。 |

□ 5枚目・8枚目

「西宮市で起きている問題を解決させるためにこれらの取り組みを実現させたい」という動機付けは非常に説得力のあるもので、自分たちの身の回りから課題を見つけ出し解決しようとする流れは自然でありよくわかった。SSTがパナソニックによる実験的な都市であり、その先進的な取り組みがこれからの環境配慮型の都市計画の一つの試金石となっていく可能性がその根拠として生きていました。

■ 6枚目

西宮に対する政策提言を行うのであれば、実際に西宮がどのような歴史的経緯で整備され、都市が開発されていったのかに触れるほうがよかったのかもしれない。前回のソーシャル探究で社会科の三木先生から「地域振興講座」で西宮市における鉄道沿線の都市整備のありかたについて解説がありました。SSTとの違いはインフラが先か、コンセプトが先か、ということであれば、阪神電車の沿線と阪急電車の沿線とで都市の在り方がどのように違うのかという点は非常に参考になる事例であったといえます。

□ 9枚目

「適切な目標を立てることが必要であり、西宮市が実現可能な目標を立てるために、一つの目安とするために、SSTがどの程度目標を達成できているのかを確かめることにした」というのは、非常に論理的でFSの目的意識がよく表れていました。西宮市に政策を提言するというアクションプランに向けて、西宮市がどの程度の環境目標を達成すればよいのかという基準を考察するというのは、PDCAサイクルを回すうえでも非常に重要な観点です。

| | |
|--|--|
| 観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。 | |
| A (5点) | 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。 |
| B (4点) | 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。 |
| C (2点) | FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。 |

■ 17枚目～20枚目

「再生可能エネルギーの利用率30%以上」という目標があくまでも「戸建て住宅」において実現されているが、集合住宅や商業ビルなどでは達成ができていないという点を「現場の人たちがもつ課題」として取り上げているのだと思いますが、「現場の人たち」がそのことに問題意識を持っているのかどうかということについて

触れるとさらに良かったのではないかと思います。「現場の人たちの声」という観点でどこまでが「声」なのかが分かりにくくなってしまっているからです。全体として達成している目標ですが、そもそもその目標は「ビルはパネルが設置できないからこれくらいだろう」として設定した目標かも知れません。本来、目標の数値はもっと高いところに設定すべきなのかもしれないということです。

□ 18 枚目・19 枚目

太陽光パネルの発電量と、戸建て、15階建てマンションと具体的な数値を出して比較しているところが良かったです。特に、実際に関西電力に問い合わせた消費電力量を確認したところや、日本建築学技術報告書を参考に試算しているところなど、必要なデータを自分たちの力で集めて検証に用いているところは大変すばらしいと思います。

また、そのことで、「屋上に設置された太陽光パネルだけではビル1棟分の電力をまかなえない」という課題を導くこともできています。

□ 26 枚目～32 枚目

「街の完成図が共通するビジョン」として、環境に配慮したまちづくりに共感する住民が集まってくることは理解ができるが、「住まい」としての快適さ、嗜好といった「価値観」が共有されているとは限らないという指摘は、よく考えられている。また、「担当の方からの回答には不十分なところがあると思っています」とFS先を客観化して冷静に分析する姿勢が見て取れ、自分たちの課題意識が前面に出てくるプレゼンに繋げることができています。

| | |
|---|--|
| 観点④ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。 | |
| A (6点) | 当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。 |
| B (4点) | 当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。 |
| C (2点) | 何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。 |

□ 32 枚目

自分たちが仮説として考察した「タウンルールを改訂すべきだ」という主張に関する根拠として立証しようというロジックがとても良いです。

■ 33 枚目

しかし、壁の色や屋根の色についての指摘であれば、簡単に解決ができてしまうのかもしれませんが。むしろ、「ブランドイメージ」や「SSTへの帰属意識や特別感」、など、住宅を消費財としてみた時の「消費行動」として分析してみるとさらに良いかもしれません。また、パナソニックには系列会社としてパナソニックホームズという住宅メーカーがあり、そこがSSTの住宅を担当しています。他の住宅メーカーとデザインや顧客の要望の実現という観点でどのような違いがあるのかについても言及できると本格的な分析になりそうです。これは、西宮市にどのような住宅が求められるのか、を検討する際にも有効です。発表時に小島先生から指摘があったように、他の地位の新興住宅地がどのように形成されているのかについて検証すべきであるというのはこういった理由もあります。

□ 36 枚目

「市民、事業者のどちらも地球温暖化対策に関する情報、取り組みに関する情報の提供を希望している」とい

う点から、SSTの住民ポータルによる環境達成度の共有という取り組みを参考にし、提言するという発想は課題を見出し、解決しようという趣旨が明確になっている主張です。

■ 39枚目

「企業と連携し、西宮市民にエネルギーの利用状況を可視化して通知するシステムを構築する」というアクションプランは非常に有効だと思います。しかし、「企業と連携し」の主語は「私たち」でしょうか、それとも「西宮市」でしょうか。もし前者なら、すでにプレゼン後に指摘があったように「財源はどうするのか」という課題が生まれます。また、後者としても「西宮市」がこの取り組みを実現するメリットはどこにあるのでしょうか。一市民の希望を取り上げて実現してもらった提言にとどまるのか、それとも、行政として取り組む価値がある取り組みだという説得力を持たせることができるのか、さらに一つ知恵を絞らなければなりません。

■ 41枚目

「高等部での実証実験」として「エコチェックリスト」を作りアンケートを取ることは良いでしょう。しかし、それが、西宮市が納得するための根拠として活かせるかどうかと言及されていないところが残念です。たとえば、高等部内でエネルギーを可視化して、高等部生や教員の意識がどのように変化し、どのような価値観が生まれたのか、また、実際にどれくらい資源が節約できるようになったのか、など具体的なデータをとることができるような取り組みであれば確実な根拠となるでしょう。

| 観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。 | |
|---------------------------------|--|
| A (6点) | スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。 |
| B (4点) | スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。 |
| C (2点) | スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。 |

□説明に応じたスライドの配置や「問い」と「仮説」と「根拠」がうまく提示できており、根拠となる数字やグラフも取り入れて説得力のあるプレゼンに繋がっていました。

■一方で、プレゼンの話の筋に影響されすぎて、情報が散逸してしまっており、筋道たてて説明するための「流れ」が見えにくい資料構成になってしまっている。また、「△」「・」「→」などの記号の使い方にも統一感と意味を持たせ、一見して論理構造やトピックが分かりやすくする工夫があったほうが良いのではないのでしょうか。限られた文字や図を提示しますので、そこに使う記号や文字は厳選して配置する必要があります。

| 観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。 | |
|----------------------------------|--|
| A (6点) | 発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。 |
| B (4点) | 発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。 |
| C (2点) | 情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。 |

■原稿の読み上げに注意が行き過ぎていて、聞いている人の心をつかむシーンが少なかったように思います。グラフを提示して「西宮市の地球温暖化対策についてみなさんご存じですか？」といった聴衆を引き込む工夫はよくできているのですが、原稿を読み上げることが多いので聞いていて単調に感じます。声の抑揚や、視線、スピードなどに気を使っているとうかがえる部分もあるのですが、全体として読み上げの印象が拭えません。アドリブでプレゼンできる部分を作る練習をしてみるとさらに良いものになるでしょう。

【教員からのフィードバック総括】

自分たちが住む街「西宮市」に対して「政策提言」を行うという、市民として社会に参画しようとする姿勢を持つことができている良かったです。オンラインインタビューではSSTの責任者の方をはじめ、現場で活躍されている方、見識に富む方などPanasonicの担当者の方々が丁寧に対応をしてくださいました。中間発表では、その取り組みの斬新さから圧倒され、全面的に調査内容を伝達することに終始しがちなプレゼンとなってしまっていました。ある先生からの「Panasonicの広告塔になるだけでは意味がないのではないか」という辛辣な指摘にも前向きに耳を傾け、自分たちがこの取り組みを通して何を目指すべきなのかをしっかりと省察できた最終発表だったと思います。環境問題は多岐に渡りますが、その中でもエネルギー、とりわけ「電力」の問題は私たちの生活に喫緊の課題であると言えます。その「意識」を敷衍するために、「広報・宣伝」するだけでなく、実際に行政に働きかけるという手法は、実効性のあるアクションプランになっています。しかし、すでに指摘しましたが、政策提言を西宮市が受け入れ、政策に取り上げて実行に移していくには、「対費用効果」を明らかにしておく必要もあります。理念だけで語ると、多くの取り組みが「必要だ」となりますが、「実現可能か」というところを検証することで初めて現実味が帯びてきます。SSTが提唱している「住民ポータル」の運用は地域コミュニティにおけるビジョンの共有という点で有効なだけでなく、防災・防犯の観点や、教育、祭りなど様々な地域文化をAIによって再興する事例に昇華させることができるかもしれません。一方向的なHPをより発展的にポータルという形で整えることは、行政にとって「対費用効果」を見込める内容である可能性があるからです。もちろん、セキュリティの問題や、市民が双方向に意見を言い合えることの問題、どの程度の規模のコミュニティごとにポータルを繋げていくのかという現実的な課題が残ることも否めません。

また、再生可能エネルギーの使用に関する具体的な数値目標を検証しようという批判的な視点や、企業の取り組みが果たして提示している通りの効果を上げているのかを懐疑的に分析しようという姿勢は非常に大切です。この探究活動を通して、一市民として企業を客観的に評価し、暮らしに繋げていく参画の仕方を見出せている点でメンバー一人一人の価値観や意識の変化に繋がっていると伺えました。非常によくできたプレゼンであると思います。実際に政策を西宮市に提言できるように活動を継続して行ってください。